

# 七五三行事にみる家族衣風景の変遷

—1990～2002年について—

内 田 直 子

## 1. 緒 言

近年の七五三行事において神社仏閣にお参りする子どもたちの服装は、一般に女子では三つ身被布（3歳児用）、四つ身振り袖（7歳児用）、ドレスやスーツ形式のもの、男子では羽織袴やスーツなどが多く見られる。

また、行事の場としても2000年代初頭には、少子化のために一人の子どもにかかる費用が多く捻出できるためか、ホテルにて七五三祝いをするなど、神社仏閣にお参りするだけでなく、「ハレ」の場のお祝いがイベント化される傾向にある時代であったことが伺われる。<sup>1)</sup>

本報告では、このような七五三の行事において、多くの家庭が実施している「参拝する」時のその「場」の状況に着目した。つまり、参拝する人々は、どのような家族形態で、またどのような服装で訪れているのか、この状況を「服装がある場に存在している一つのシーン」として「衣風景」と名付け、その実態を捉えようと試みた。この状況を把握するため1990年から定点観察調査を行い、服装と家族と場の関係を経年的視点から考察した。

七五三に関する近年の研究には、1990年時点の七五三に関する祝着の服種と着付け方、調達方法、七五三に関する意識などの衣生活行動から着目した研究<sup>2)</sup>や、ファッション化する子供用品について、七五三の近代初期の消費イベントの事例から言及した研究<sup>3)</sup>などがある。本研究は、経年的に七五三という行事を通して着装、家族関係、場に視点を当てている点で、これまでの研究とは異なり、近年の衣生活文化の考察に寄与していると考えられる。

本研究の調査は、表題にある1990～2002年間で以降も継続して記録を蓄積中であるが、同じデザインの服でも時代によって「服装の格」の位置付けに違いが見られるため、長期での同一服装の比較が困難なことがある。そのため、まず10年程度を一括りとして捉え、またそれ以後の10年と対比考察していきたいと考えている。また、社会状況という点からも平成不況期<sup>4)</sup>を一つの括りとしたため、今回は1990～2002年間の調査結果について報告する。2002年以降についてはデータの蓄積を待って、これから先の衣風景の様子はどのような方向を辿っていくのか、そしてその背後にある価値変化は何であるのかの考察を含めて、今後の分析研究に譲りたい。

## 2. 調査方法

### 2. 1 調査地

調査地は東京にあるA神社とした。ここは交通機関のアクセスもよく、七五三付近の日曜日あたりには参拝者で大勢賑わっている。そのため、新聞やTV等の報道取材陣やアマチュアカメラマンがよく来ていることなどから、代表的な「ハレ」の場の一つとして相応しいと思われたため、ここを調査地とした。

### 2. 2 調査手法

調査手法は定点観察調査法で行い、参拝を終えた家族全員の服装を和服または洋装に区分し、洋装に関しては上下同系色などのいわゆる式服として着用する「フォーマルドレスまたはスーツ」、普段着ではないが式服よりカジュアル性の要素がみられる「カジュアル」、さらに普段着使いとみられる「普段着」、そして「その他」に分けて記録した。

### 2. 3 調査実施年と天候状態

調査実施年は1990年から3年毎とした。3年の期間をとったのは、適度な現象の変化がみられると考えたためである。実施日時は各年とも参拝客が多く見込める、11月15日の直前にあたる日曜日の午前から午後にかけての時間帯とした。天候は5回とも晴れであった。

### 2. 4 対象家族数

対象家族数は、各年200組前後を目処とした。その結果、有効調査数は1990年191組、1993年185組、1996年226組、1999年201組、2002年200組である。

## 3. 結果および考察

### 3. 1 同伴家族の状況

一家族の人数の傾向は図1に示すとおり、七五三本人を含めて調査1回目の1990年は4人家族以下が全体の約80%を占めていた。しかし、年が経過する毎に4人家族以下の割合は減少し、2002年では50%を占める程度になった。逆に、6人家族以上が1990年では5%も満たなかったが、2002年では20%以上を占めるまでに増加している。

同伴者は図2に示すとおり、母親の数は各年95%前後で、父親は母親よりも少なく、1993年以降に関しては90%前後の同伴率である。顕著に家族の中で増えたのは、祖母と祖父であり、「祖母が1人以上いる家族（祖母が2人いる家族を含む）」は、1990年には31.4%であるのに対し、2002年にはこの2倍近い58.0%になっている。さらに、「祖母が2人いる家族」は、1990年には3.1%ほどであったのが、2002年にはこの5倍以上の17.0%を占めている。同様に「祖父が1人以上いる家族（祖父が2人いる家族を含む）」は、1990年の15.2%から2002年の37.0%と2倍以上に、「祖父が2人いる家族」は、1990年には0.5%ほどであったのが、2002年には4.5%

と9倍にもなり、同伴者数としては祖母より少ないものの、増加度合いは祖母以上に著しい結果となっている。

この他、「兄弟姉妹が1人以上いる家族」は各年とも35～45%程度いる。また、特に2002年には、七五三本人にとっての叔父・叔母までが200組中叔母5組、叔父1組存在している。以上から年を追う毎に同伴者が増加し、大所帯で参拝する傾向になっている。

### 3. 2 七五三時の着装状況

#### 3. 2. 1 七五三本人の着装状況

図3は七五三本人と家族の和装率をまとめたものである。女子の場合では、7歳児は各年80～90%が和装である。一方、3歳児は調査当初は60.5%だったが、これを除

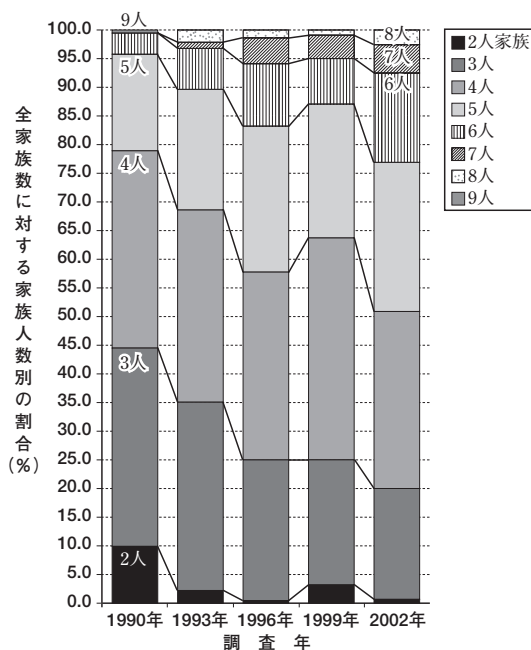


図1 年別全家族数に対する家族人数別割合

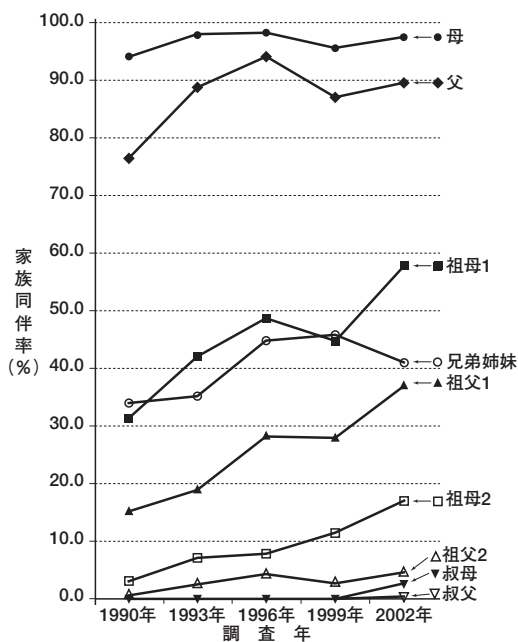


図2 年別家族同伴率

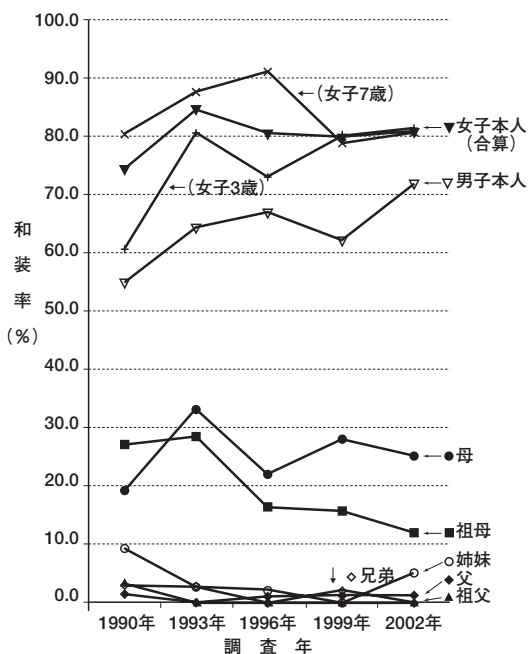


図3 七五三本人と家族の和装率

けば、その後は70～80%を占め、女子全体として約80%が和装であることが伺える。

男子の場合では、どの年も女子より和装率が低い結果となっているものの、1990年では54.8%、2002年では71.8%となり、この10年余りの間で17%も顕著に和装化が進んだことがみてとれる。

女子の着装事例について図4に示した。和装は三つ身被布(図4(a))、四つ身振り袖(図4(b))などの一般的な着装がほとんどであるが、中には「袴姿(図4(c))」もある。洋装になると、シンプルな子どもの典型的なおでかけ着(図4(d))のようなものから、もっと華美なドレス(図4(e))などもあり、洋装のほうが個性を出しやすいせいか、多様化しているように見受けられた。全体的に、フォーマルと格付けされるものが主流であるが、若干セーター姿の普段着の子どもも、各年数名存在している。

男子の着装事例については図5に示した。和装は、羽織・袴(図5(a))の一般的なものが主流であるが、中には、兜・鎧(図5(b))、袴(図5(c))、烏帽子・狩衣(図5(d))など、女子以上に和装の方の多様化が目につく。逆に、洋装の場合では、三つ揃いスーツか、それに準ずるスーツ姿(図5(e))がほとんどであり、稀にシルクハット(図5(f))を着装している子どももいた。

### 3. 2. 2 家族の着装状況

家族に関しては図3のとおり、母親の和装率は20～30%の間を推移している。逆に言えば70～80%が洋装ということになる。母親の着装例として図6に示した。和装は訪問着(図6(a))がほとんどあり、洋装では一般的な入学式などに着られていたフォーマルスーツ(図6(b))から、年々、パンツスーツ(図6(c))やニット風の上下(図6(d))など、同じ洋装でもフォーマル系が減少し、カジュアル系が増加している。

父親は、200組中1家族が稀に羽織姿の和装をしている人もいるが、ほとんどが洋装である。ただしその内、1990年はスーツが全体の90%を占めていたが、2002年には82.1%に下がり、カジュアル的な服装が目立つようになってきた。中には、ジャケット、セーター、ジャンパー姿などもある。

祖母は、和装が1990年は30%近くいたのが年々減少し、2002年は10%余となっている。年齢を仮に60歳とすると、同じ祖母という立場であっても、「1990年の祖母」は、1930(昭和5)年生まれ、「2002年の祖母」は、1942(昭和17)年生まれで、祖母本人の生活価値観の中に和装の比重が違っていることも和装化減少の一因ではないかと考えられる。

祖父は、1990年から2002年迄ほとんどスーツとなっている。

兄弟姉妹も洋装がほとんどだが、洋装でも制服や普段着を着装する者や、七五三本人に便乗してお揃い風にスーツや着物になっている者など、一定の傾向は余りなく、各家族によって多種多様になっていた。

内田：七五三行事にみる家族衣風景の変遷 —1990～2002年について—

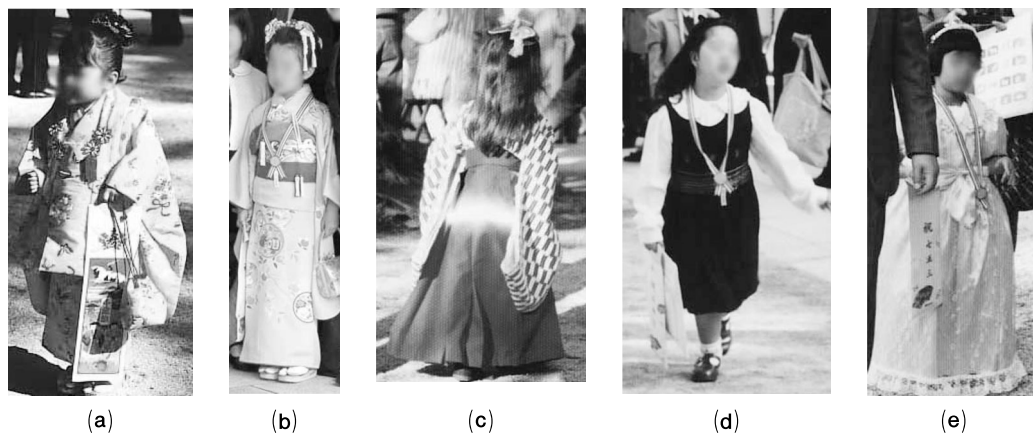


図4 女子の着装例

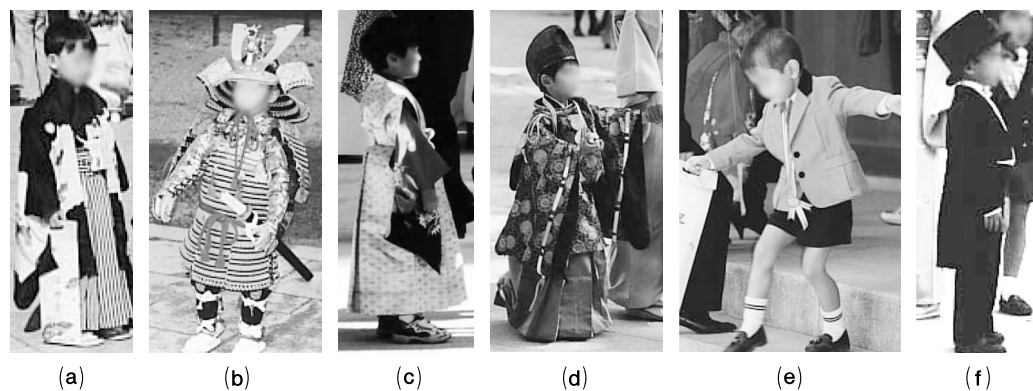


図5 男子の着装例



図6 母親の着装例

### 3. 2. 3 七五三本人と母親の着装関係

家族の中で子どもと両親を一括りの姿として捉えた場合、父親はどんな家族でも洋装が中心であったが、母親は和装、洋装と家族によって多様である。この七五三本人と母親の着装関係を表1の(1)と(2)にまとめた。この時の対象家族は七五三本人と母親の服装の両者の数値が取れた組で、さらに七五三本人が兄弟姉妹で一家族に二人以上の場合も、各々を七五三本人と母親との関係として算出したため、数値は延べ人数となっている。また女子の三歳、七歳は混合して算出している。

女子では、経年的な全体の傾向として「娘和装・母親和装」の組より、「娘和装・母親洋装」の組が平均2倍程度多い。しかし、「娘洋装・母親和装」という組はほとんどない。一方男子では、年を追うごとに男子自身の和装が増加していたため、「息子和装・母親洋装」の組は全体的に増加傾向にあり、逆に「息子洋装・母親洋装」が減少傾向にある。また、「息子洋装・母親和装」の組は女子の「娘洋装・母親和装」よりも存在している。これは、同じ行事の主人公である子どもでも、娘が和装でないのに、同性の母親が格上の和装になるは抵抗感があるが、息子の場合は娘とは違う位置づけで、母親が和装にしても娘ほどには抵抗感がないのではないかと推察する。

表1 七五三本人と母親の着装関係

(1)娘との場合							(%)	(2)息子との場合							(%)
年	娘	和 装		洋 装		対象 組数 (N)	年	息子	和 装		洋 装		対象 組数 (N)		
	母親	和装	洋装	和装	洋装			母親	和装	洋装	和装	洋装			
1990		22.6	51.6	0.8	25.0	(124)	1990		16.1	37.9	2.3	43.7	(87)		
1993		32.8	54.0	0.7	12.4	(137)	1993		35.8	28.4	3.0	32.8	(67)		
1996		17.8	62.4	0.0	19.7	(157)	1996		27.5	38.8	2.5	31.3	(80)		
1999		25.2	53.3	1.5	20.0	(135)	1999		24.3	37.1	2.9	35.7	(70)		
2002		27.5	53.4	0.0	19.1	(131)	2002		21.2	50.6	1.2	27.1	(85)		

### 3. 2. 4 七五三本人と同伴家族の服装の格の変遷

日本人の一般的な「ハレ」の場への服装の視点からの関与は、女子本人がどの年も和装が8割を占めること、また同時に男子本人の和装化が顕著に進んでいることから、その儀式の主役の人だけが普段全く着ることのない装いをする、もしくは周囲がさせようとする思いが感じられる。しかし、祖母の和装の減少や母親のカジュアル的装いの増加は、本人以外は洋装化が主流となり、その中身もカジュアル化や略式化の傾向になっているといえる。

この七五三行事の場合、多くは「この服装がその場に相応しい」という前提で着装している

と思わる。つまり、1990年は「子ども・和服、母親・上下共布のフォーマルスーツ、父親・スーツ」というのは、一般的に七五三の装いとしてその場との適合性が高いと世間で認識されていたことになり、母のカジュアルなスーツは、当時としてはやや砕けたイメージであったことになる。

しかし、母親のカジュアル化が進んだことで、1990年ではやや砕けたイメージであったものでも、2002年では「ハレ」の場に相応しい装いの範疇に入ってきたことになったと思われる。1990年からみれば、それは「簡素化」した、または「カジュアル風な」装いではあるが、2002年当時としては、それがその時代のフォーマル性のあるものの一つとして認められるということになり、同じ七五三の「場」でありながら、この10余年間だけでも、場と服装の適合の価値観が変わってきていることが顕著に伺える。

#### 4. 総括

1990年から2002年まで七五三家族の定点観察調査を行った結果、家族内容は、当初は本人と両親が主流であったのが、年々祖父母同伴が増加し、大所帯での参拝が目立つようになった。着装では、七五三本人の女子は和装が8割であり、男子も年々和装が増加し2002年では和装が7割を占めた。同伴家族では、特に女子の場合、母親が和装であれば、娘も和装が大半で、娘が洋装で母親が和装ということはほとんどない。父親はどの年もスーツが多く、家族の服装に左右されないことなどが明らかとなった。また、母親、祖母は、装いの簡略化の傾向があり、前時代の略装的なものが次の時代の正装とみなされることが実証されたと考える。

#### 注・引用文献

- 1) 日本経済新聞（朝刊）、ホテルで七五三、日本経済新聞社、2002年10月31日付（2002年10月31日）
- 2) 松山容子、布施谷節子：七五三の祝着にみた衣生活行動、大妻女子大学紀要、家政系、Vol. 31, pp.31-39（1995年3月）
- 3) 神野由紀：ファッション化する子供用品—近代初期の消費イベントとしての七五三の事例を中心に—、デザイン学研究（日本デザイン学会研究論文集）、Vol.54, No.1 pp.69-76（2007年5月）
- 4) 日本の1990年代の経済状況は、経済成長率でみると1980年代とは打って変わり、「失われた10年」といわれるように1991年のバブル崩壊後、2001年頃まで低成長時代となった。その後2002年1月を谷に、ようやく回復しだした経緯から、本報告でも1991年から2002年頃を平成不況の時期として捉え、この期間を網羅する1990年から2002年の調査結果に限定し

て、今回は考察した。

岩田規久男：景気ってなんだろう，筑摩書房，pp.21-22（2008年10月）

三橋規宏，内田茂男，池田吉紀：ゼミナール日本経済入門〈2005年度版〉，日本経済新聞出版社，pp.100-103（2005年4月7日）

三橋規宏，内田茂男，池田吉紀：ゼミナール日本経済入門〈2002年度版〉，日本経済新聞出版社，pp.84-85（2002年4月8日）